

# いこいの森

No.13

〒241-0811 横浜市旭区矢指町1197-1 電話 045-366-1111

部門紹介  
シリーズ  
-6-

## 内 視 鏡 部

内視鏡部副部長 二階 亮



近年、内視鏡検査はさまざまな分野の診療に欠かすことのできない手段となってきています。内視鏡機器は日進月歩の勢いで進歩しており、従来のファイバースコープの代わりに電子スコープが広く用いられるようになり、モニターに映し出される画像を見ながらチームで診療を行なうことや、ハイビジョン並みの画質を得ることも可能になってきました。また、特殊な光源の光を当てて早期の癌の発見に役立て、ルーペのように拡大して観察することもできるようになりました。また、内視鏡を利用した治療も広く行なわれるようになり、体に対する負担が今までより小さくすむようになっています。

当院の内視鏡部は、内視鏡による診断や治療を通じて各科の診療に協力している部門で、消化器内視鏡と気管支鏡による診療を行なっています。

消化器内視鏡では、食道・胃・十二指腸を対象とする上部消化管内視鏡検査、大腸内視鏡検査、胰管・胆嚢・胆管の造影を目的としたERCP（内視鏡的逆行性胰胆管造影法）などが行なわれています。

上部消化管と大腸の内視鏡では、通常の画像に加え、色素散布や拡大観察、時には特殊光による観察を組み合わせて各臓器の炎症や良性腫瘍、癌を発見・診断しています。内視鏡を通して消化管に入れられた鉗子（かんし）を使用して病変の一部を採取し、顕微鏡で観察する生検病理組織検査も併用されています。腫瘍や癌の深達度を知るため、エコーの装置と内視鏡を組み合わせた超音波内視鏡検査（EUS）も可能になっています。ま

た、これらの良性腫瘍や早期の癌に、高周波と呼ばれる特殊な電流を通して、病変を切除したり焼きこがしたりする治療も行なっています。

さらに、食道の静脈瘤からの出血予防や止血を目的として、輪ゴムのようなリングを静脈瘤にかけたり、静脈瘤の中や周囲に薬液を注入したりして静脈瘤をつぶしてしまう治療（EVL・EIS）や、胃十二指腸潰瘍からの出血を金属性クリップや薬液注入で止めることも、内視鏡の使用で比較的容易にできるようになりました。

気管支鏡は気管・気管支・肺が検査の対象になります。

気管支鏡から気管支の中に散布した液を吸引回収し、液の中に含まれる細菌や細胞を詳しく調べる検査（BAL：気管支肺胞洗浄）や、レントゲン透視をしながら気管支鏡を通して鉗子を肺の病変部まで誘導し、生検組織を採取する検査（TB LB：経気管支肺生検）などにより、気管支・肺の炎症や癌などの診断が可能になっています。また、昨年からは、気管支鏡に超音波診断装置を通して、気管支腔内超音波（EBUS）ガイドシース法を用いた末梢肺病変の診断も手がけております。

平成18年度は、消化器内視鏡5,605件（うち上部消化管3,973件、大腸1,632件で、ポリープ・腫瘍の切除は263件）、気管支鏡170件の診療実績を挙げています。

当院の内視鏡部では、専任のスタッフとして、

臨床検査技師・看護師・看護助手・事務員が勤務していますが、医師は各診療科（主に消化器内科・消化器外科・呼吸器内科）に所属し、内視鏡業務を兼務して各科の診療に協力しています。

当部は日本消化器内視鏡学会および呼吸器内視鏡学会の指導施設に認定されており、各学会の指導医・専門医の指導のもとに担当医が診療にあたっています。さらに、臨床検査技師も内視鏡技

師の学会認定を受け、学会のガイドラインに沿って自動洗浄器による機器の洗浄・消毒や管理を行って内視鏡による感染リスクの低減に努めています。

以上、当院内視鏡部の現況を概説いたしましたが、スタッフ全員が、安全で苦痛のない検査をモットーに努力しており、安心して内視鏡診療を受けていただけるものと信じております。



## ● ● ● 画像診断部 ● ● ●

皆さんおはレントゲンという言葉はよくご存知ですね。約100年前、ドイツの物理学者レントゲン博士が発見したX線のことを俗にレントゲンと呼んでいます。そのX線も含め、種々の放射線や超音波や磁場を利用した検査などを行っているところが、画像診断部です。

画像診断部の業務は1階と地下階に分かれており、1階ではX線を使った検査室が配置され、その業務内容は一般撮影・CT・血管造影・消化管造影・特殊透視・骨密度測定を行っていて、読影室やファイル室などもあります。地下階では強力な磁場と電波で撮像するMRI検査、超音波を使ったUS検査、ラジオアイソトープ（RI）を使った核医学検査があります。その他、手術室での撮影装置や各病棟・救命センターなどへは回診用ポータブル装置で撮影を行っています。

現在の医療は画像診断なくして成り立ちません。多岐にわたる画像検査は高度化が進み、装置と技術はデジタル画像を筆頭に最先端の医療機器を駆使するようになりました。当院でも、一般撮影や透視検査ではFPD搭載のデジタル撮影装置が導入され瞬時に画像を確認でき低線量でも高画質情報が得られるようになり、CTでは64列MD CT、MRIでは高磁場1.5T装置の導入により、さらに高速で高分解能スキャンが可能となり詳細な3D画像や動画が得られるようになるなど、診断の精度は格段の進歩を遂げました。しっかりととした画像診断が医療の質を保証する第一歩となって

画像診断部部長 山内栄五郎



います。

しかし、当院でも画像のデータ量は莫大となり、フィルムに印刷すること・フィルムを保存管理して行くことが困難となつて來たため、今後は画像データをネットワークでやりとりするPACS（医療画像保存システム）を導入し、各診療科や病棟などでもリアルタイムに検査画像を参照・閲覧するシステムの導入が求められています。

画像診断部では、病気の診断をするいわゆる画像診断のほか、血管撮影などの検査手技を応用したIVR治療（動脈塞栓術、血管形成術、動注化学療法、動脈瘤の血管内手術、血栓溶解術、ステント留置術、経皮的胆管ドレナージなど）も、各診療科と連携して行っています。中でも、山内法

（磁石による圧迫吻合術）は、手術では困難な腸管-腸管吻合や胆管-腸管吻合など、画期的な治療法で全国から注目を集めています。

画像診断部の人員構成は放射線科医師（常勤）6名、診療放射線技師22名、看護師9名、看護助手1名、事務職員12名、トランスクライバー2名、放射線管理1名などから構成され、チーム医療としてお互いの協働体制により、又各診療科とも密接な連携を保ち、地域の住民に高度な医療を提供するという西部病院の中心的役割を担い、患者さま中心の安全で安心な質の高い医療を提供できるよう、日々努力しています。

平成20年4月25日発行

発行：聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院広報委員会・総合相談部 〒241-0811 横浜市旭区矢指町1197-1 TEL:045-366-1111  
企画・制作：株式会社 教育広報社 〒102-0075 東京都千代田区三番町30番地2 財団法人 大蔵財務協会ビル TEL:03-3263-9926